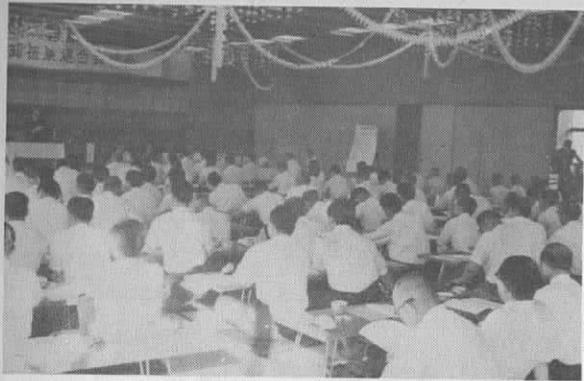


キブツと資本主義日本

(キブツ研修生の家族の方も一読を) 手塚信吉



於 札幌市卸商業組合キブツ講演会

キブツはイスラエルと言う資本主義国で矛盾なく健全に発展している共同体であるところに着目して、その思想精神を日本に取入れて、零細農業や中小企業の共同化に役立てようと考えたのが我々のキブツ運動であり、キブツ研修を希望する青年男女を、お世話するのそのためである。日本におけるキブツ思想普及活動も十年余になるが、大人の世代で理解する人は非常に少ないのみでなく、却って曲解して警戒したり、冷笑したりする人さえあるが、反駁するよりも歴史という公正な行司の裁きを待つことにしている。従ってキブツ研修生にしても、書物などで充分研究して、自発的に体験を通して研修したいという

熱意ある方を、斡旋するのであって決して無理なお勧めはしない。この点を本人もご家族の方も誤解しないで頂きたい。
さて、私をはじめイスラエル国を訪れたのは一九六二年ですから十一年前であった。当時日本ではあまり知られていなかったのがキブツという共同体社会を視察して、アッこれだ、これこそが人間社会の本当の在り方である。人類が求め求めて到達する終着点はこれだと痛感したのであった。それというのは自分の産業人としての五十年間の体験から生じた人生観と一致していたからであった。
キブツを真似たら日本農業も中小企業も一挙に救われよう。いや、日本のような国柄こ

そキブツ的な共同協力の社会が必要なのである。そうだ、己れの生き残りの人生をキブツ思想の普及に捧げようと決意して、それから正月十六日間、新旧大小七キブツに亘って滞在研究し、十二月帰国早々、キブツ見たまま感じたままを、一冊の単行本にまとめて「新しい農業キブツ」と題して世界ジャーナル社から三千部を発行販売した。これが日本最初のキブツの専門書であった。

珍らしさもあってよく売れ、その読者から六百余通も共鳴、賛辞、激励等の書面がありそれに力づけられて日本キブツ協会を設立し、五年後には有力者多数の参加を得て「社団法人日本協同体協会」と改称、各方面からの求めに応えて、北海道から九州まで講演会に、座談会に、東奔西走幾百回に及び、キブツの名称は忽ち全国に知れわたり、一九六六年七月には大韓民国の京畿道知事、韓国農協中央会長、F O B 韓国会長共催の農業共同化普及講演会に招かれて、北は江原道から南は全羅南道まで、十五日間、至る処で講演会を開催し、熱狂的な盛況であり、日韓合併のキブツ村計画も真げんに取上げられたほどであったが、民間投資の制限時代で中絶してしまった。日本国内にキブツ村の計画も再三進められ

たが、今の日本の大人の世代は一獲千金的な好条件事業にはとびつが、キブツのような共同の利益とか、利己心の抑制などは敬遠されがちであって、低迷状態にあるが、最初は考えてもいなかったキブツ研修生送りが、意外に多忙となったのである。

キブツの新時代的な雰囲気と純粋性が、純心な若者の時代感覚に合致してか、キブツ研修生として、イスラエル行きを希望する青年男女が、次第に増加し、一九六七年からそんな若者の要望にこたえて、グループ研修生をお世話することとなり、すでに十一回三百六十名を送っている。勿論営利事業ではないし父兄の承諾のない方はお断りしており、その父兄の大半は、中東危機感とキブツへの無理解とで反対であるから、希望者の三分の一も行っていない。

いまの日本は海外旅行ブームで、昨年一年で実に百三十五万人も、新婚旅行だ、福引旅行だ、農協慰安旅行だ等々、観光旅行大繁昌、パリもロンドンも、ローマもニューヨークも日本人客で押すな押すなの大繁昌、金使いの派手なことで世界的に名声があるという。そんな金があるなら、これからの日本に必要な共同体の研究や研修に投じた方がどんなに

日本のために役立つか、計り知れないものであるが、それと知ってキブツ研修生を希望する人は一部の青年男女にすぎない。

これからの日本では、農業でも中小企業でも、合同共同化が、機械化近代化を進めて能率化する必要がある、その合同にしても共同にしても、先づ邪魔になるのは個人主義的な考え方であるから、キブツのような見事に



稲瀬農協キブツ座談会

成長した共同体を、体験と理論と併せて知ることが、青年男女には特に重要なのである。両親のキブツ行き反対の理由を調べてみると、一に中東危機があり、二に日本の繁栄と観論であり、三にキブツの内容認識不足であ

一、中東紛争渦中にあるイスラエルは危いか

旧約聖書にあるカナンの地、パレスチナは何千年の昔から、ユダヤ民族とアラブ民族との係争の地であり、そのために却って他民族に奪われたり、支配されたり両民族ともにさんざん苦しんできたのである。近世になっても、第一次世界大戦まで三百余年もトルコ領であり、住民は圧政に苦しみ、土地は荒廃しつくしていた。敗戦トルコ帝国から開放されたが、今度は中東一帯とともにイギリスの委任統治領にされてしまった。

それから二十余年後、第二次世界大戦後、植民地開放、民族国家独立の機運がたかまり、新興国がアジア、アフリカの至るところに続出して、中東地域でもアラブ民族国家であるレバノン、シリア、ヨルダン、イラク、等々

るから、これ等に対して私の意見を述べて、判断の資料として頂きたい。キブツの本質に反対の人もあろう。そんな人はキブツ研修生も送らない方が双方のためでもある。

が誕生し、それと期を同じくして多年の宿願であったユダヤ民族の国、イスラエルも再建されたのであった。エジプトやスタータンもイギリスの保護国から独立したのである。

これ等新興国の産みの親は国際連合本部であり、その国際連合の総会で慎重審議の上で決定したものは、各国とも尊重すべきものであって、もし不満があれば国連に提訴して再審を求めるべきであった。イスラエル国の独立に反対して、ユダヤ人皆殺し宣言をし、戦争を仕かけた事は無茶であり、そんなことが認められては、世界秩序が保たないであろう。

一九四八年五月十五日国連の承認に基づいてイスラエル共和国は独立宣言をした。米ソ両国とも同時承認であり、その他の各国も米

ソ両国に同調したが、アラブ各国だけは反対したのみでなく、突如としてアラブ連合軍十五万の大軍が、イスラエル国の三方から攻め込んだ。イスラエル側には独立直後のことで軍隊も兵器らしい兵器もなかった。

その時大活躍したのがキブツ村であり、必死の防戦にあたり、その間に、募兵に武器の輸入に全力を尽して抗戦一ヶ月余り、全く奇蹟的な勝利を得たが、国連が乗り出して休戦協定が成立した。イスラエル国はその後、海外在住ユダヤ人の支援協力を得て、着々国造りに懸命であったが、一九五六年にはスエズ戦争で英仏に協力した外は小康状態であった。

アラブ連合側は大国の援助を受けて、軍備の大拡張をつづけ、その軍備に自信を得るとともに、忽ちイスラエルに対して挑戦的となり、ついに一九六七年六月アカバ湾封鎖宣言となった。スエズ運河の通行を拒絶されていたイスラエルが、アカバ湾まで封鎖されては絶対絶命、死の宣告に等しい。座して死を待つか国運を賭して戦うか、二者択一の窮地に追いつめられ、止むを得ず立ち上った。それが世界にも前例のない疾風迅雷六日戦争の大決戦であった。

さて、ナセル大統領のような、賢明な人物

が、なぜイスラエル国の絶対不敗体制が洞察できなかったのか不思議でならない。私はあの戦争の五年前、一九六二年にはじめてイスラエルのキブツ視察に訪れたとき感じたことは、共同体体制の確立した国は小国でも強い。アラブ四ヶ国が東になって攻め込んでも勝ち目はない。両民族国家は争うよりも協力して、あの広大無辺な中東大砂漠地帯を開拓すれば共に富み栄えるであろうと、著書にもかいたほどであった。

それから五年後、六日戦争直前であった。北海道教育大学教授、草刈善造先生を絵中心として、第一回キブツ研修生、一行四十七名の出発可否決定の時であった。イスラエル国には死はあっても敗北はない。アラブが立てば負ける、だから賢明なナセルは立たないと判断した。草刈教授も同意見であり、パトール、イスラエル大使は吠える犬は食いつかないと、揶揄した言葉でそれに賛成された。かくして研修生一行ラマト・ヨハンナ組二十四名は四月十二日、ダリヤ組は五月十一日出発し、そのダリヤ組到着十五日後には戦争勃発、そして三日目には勝負がついていた。イスラエル共和国、独立当時のユダヤ人口は百万足らずであった。その後年々世界各国

に散在していたユダヤ人が移住して、自然増もあり、今日では三百万を突破するのに近いというが、その国土は二万一千平方キロ、日本の四国と同じぐらいで、荒廃した不毛地帯であったパレスチナ、即ちイスラエルは今も豊饒肥沃な農地と一変し、道路は四通八達して至るところ近代都市が出現し、治安秩序の確立している点では世界一と言われている。

ユダヤ人はアラブ人の土地を奪って国外に追放したぐらいに思っている人もあるが、そんなことはない。一九四八年のアラブ連合軍がイスラエル国内に攻め入った時は、三日間でユダヤ人を一人残らず殲滅すると公言し、パレスチナ在住アラブ人を作戦上一時立ち退きさせたもので、その数は五十万人とも六十万人も言われている。ところがユダヤ人殲滅どころか、アラブ軍が大敗してしまつたので、立ち退きさせたアラブ人が難民化して、現在、人口は二倍以上にふくれ上つてしまつた。それ等の難民が今もなお、国連の救援食料で生活している。一方あの時、反対にアラブ側から追放されたり、逃げ込んでイスラエルに入ったユダヤ人も三十万人と言われているが、イスラエル政府は、彼等に家を与え、職を与え、そして又、彼等もよく働いて今は

立派な中堅国民になっている。またあの当時、イスラエル国内に踏み止まったアラブ人も三十万人と言われているが、アラブ各国がユダヤ人を虐待追放したのとは反対に、ユダヤ人と対等の権利が保証されており、社会的な地位の高い人物も少くないし国会議員も数名選出されて、政界に活躍している。

六日戦争の占領地域は、イスラエル国の二倍余の面積があり、人口も百五、六十万人と言われているが、イスラエル政府は政策的に職業を奨励したり、土木工事を起したり、生活の安定に努めているから、ガザ地区なども最近平穏になっている。イスラエル国内の至るところ土木工事が盛んであり、何万人というアラブ人が占領地区から来て自由に働き高賃金を得ているので安定している。私は一九七〇年十月キブツ視察旅行団長として、一行二十五名と共にイスラエル各地を二週間に亘って視察したが、その時のホテルはナザレで一泊、エルサレムで四泊、ともにアラブ人経営のホテルであり、日本人と知ると特に親近感と好意をもって接してくれた。一行から離れてキブツ研修生問題でイスラエル外務省に行くとき、アラブ人個人タクシーに

乗ったのが縁となって、その翌日一日中キ
リアット・アナヒム、ベツレヘム、死海、ジ
ェリコと案内され、彼の自宅にも立寄って一
家と記念写真をとるほど親しくなり、色々実
情をきくと、現在のイスラエル政府の占領政
策は寛大であり、税金も安し治安秩序も確
立しているので不平はない。だが、いつまで
も占領地区になっていることは、どこの国民
だって喜ぶはずはない、と言っていた。

勿論日本はアラブとも、イスラエルとも、
友好親善国であり、中東の平和安定を祈るも
のである。キブツ研修生を送るからイスラエ
ルの味方でアラブの敵だ、そんな小児病的な
偏見は当たらない。アラブ人でも公正な考えを
持っている人はそんな見方はしないであろう。
私はキブツの研究に二回イスラエルに行っ
て、アラブ人とも接したが、キブツ研修生を
送っているからと白眼視されたことはない。
それどころか日本人だと知ると、特に好意を
示して迎えてくれた。

中東紛争で損をするのは、イスラエルもア
ラブも同じである。復興がおくられて打撃を受
けるのはアラブ各国である。日本の報道陣な
ども、興味本位の挑発的危機説など謹んで静
観して貰い度い。双方に鳩派もあり、平

和論者もいるが、扇動され放しでは出るに出
られないであろう。アラブ復興のために日本
青年が、アラブ青年と共に、あの広大なアラ

二、中東危機より個人主義日本の危機が心配

いまの日本が、どんなに平和繁栄にみえて
も、危機は刻々足下にしのびよっている。そ
れに気づかないほどの呑気さが、危機の本体
である。毎日、新聞をみるのが恐ろしくて眼
をそむけていると誰かが嘆いていたが、道義
の退廃した世相では、叩けばどこからでも、
埃りが出よう。政財界の腐敗も国民はもう諦
めたのか、神経が麻痺してしまったのか、無
関心になっている。

政治家をみても、財界人をみても、ポロ儲
けの元締めぐらいに思うだけ。学者や科学者
をみても、たいこもちを思う。そして羨しい
とは思っても、義憤は感じない。刺激に慣れ
て正邪善悪のケジメを忘れている。

あくことを知らぬ物欲の鬼となって、利潤
追求に余念がない。そして、人を疑い、人を
警戒し、信ずるものは自分だけ、個人主義日

本の大平原にキブツ村の構想だって夢にして
しまいたくない。

本も病膏盲に入ると言うべきのみ。

政財界の刷新が叫ばれても、社会秩序の確
立が叫ばれても、人間性回復の急をつけても
そんなことには馬耳東風、自分の利害に関係
がなければ反応さえない。どんなに国益を損
する不正邪悪を耳にしても、懐の痛む問題で
ないかぎり、高見の見物、さわらぬ神に祟り
なしで、一向知らぬ顔の半平さん。

だが、コソ泥や巾着切りなら、見逃したと
ころで大したことはないが、国政を司どる為
政治家の不正に寛大では、国そのものが危くな
る。最近一流新聞雑誌をみても、官公庁でも
会社でも、銀行でも、組合でも、学界宗教界
までが、背任、横領、詐欺、隠匿、脱税、持
ち逃げと、とても読み切れないほどだ。ちょ
つと数例をあげて皆んで考えてみよう。

1 国会議員も大半は選挙費で失格者

昨年の総選挙で代議士さんが五百名ほど
当せんした。その法定選挙費は区域により
相違もあるが、最高でも一人一千万円とは
ならない。だが、億単位が常識化しており、
野党議員でも二、三千万円は最低実費であ
り、どんな有力候補者でも法定選挙費用で
は、市川房枝女史の運命になるそうだ。だ
から、今の議員の大半は、失格者というこ
とになる。世間の噂は公然の秘密で、検察
当局の総発動もきかないし、世間も裏話と
してきき流す。証拠なければ無罪放免、そ
れが政治悪の根元となっている。

2 国会議員は年中総選挙、その費用の出所

はどこか、ある政界の古つわものが、嘆声
をあげて告白している。今の国会議員は、
年中総選挙同様であって、選挙区に多いの
になると二、三ヶ所の事務所を置いて二、
三人の事務員を常勤せしめて、選挙民の冠
婚葬祭の世話をする。費用一ヶ所一ヶ月
五十万円としても三ヶ所で百五十万円、一
ヶ年一千八百万円は吹き飛んでしまう。勿
論、議員会館には、国費の連絡事務室があ
り、秘書と助手とで二、三人、陳情団だ視

察団だと相次ぐ選挙民のご来訪に、眼を丸
くすることはばかり、何千万円稼いでみても
追いつかない。小選挙区制になればなつた
で、情実が深まって費用が減るところが一
層増大するばかり。これで満足の政治がで
きるわけがない。議会とは伏魔殿の別名に
すぎないと誰かが言っていた。

3 日本の農産物価は世界相場の二倍三倍、

輸入でポロ儲けするのは誰なのか。日本で
は零細個人百姓を保護するために、輸入食
糧はトンネル会社や委員会を作って価格調
整をして、高売りするので大儲けとなる。

もう十年前であるが、香港の店でバナナを
買ったら百円で太いのが十本あった。当時
東京の菓物店で買うと四、五百円の品であ
る。帰国してその道の商人に尋ねてみると
台湾バナナの大半は日本に輸出するのであ
るが、嚴重な輸入統制が行なわれ、トンネ
ル会社三社が独占しており、更に統制委員
会も経て小売店にさばくのであるが、安く
売ると日本の農家のリンゴやみかんの価格
に波及するから、高売統制をさせられてい
る。だから香港価格の三、四倍するのだと。
それと同じことが、年間三十億ドルも輸

入する農産物全部を、日本零細農業保護の
美名の下に、とんでもない巨利が行方不明
になっている。途方もない政治資金と無関
係ではないという噂である。

昨年十月末、豚肉不足で中国から緊急輸
入をしたが、価格は日本の六分の一。そん
な安価な豚肉を日本市場で売られたら、百
姓が困ると大騒ぎ、中国産豚肉の大量輸入
はしたが、大して国内品と変らない小売り
価格であった。笑いの止まらないような大
利益はどこに逃げたか一切うやむや、直接
自分が大損でもしない限り、個人主義日本
人は無関心である。

4 輸入食料にかぎらないが、トンネル委員

会だ。トンネル会社だと、何百何千と数え
きれないほどあって、政治屋の古手や官吏
の中古品が、委員長だ社長だと顔をならべ
て一週間に一、二回ご出勤になるだけで、
取扱品の名も知らないのが、月給百万円、
百二十万円、ポロ儲けどころか、ただ儲け
である。

学識経験者とやらを、やたらに並べた何
々審議会だ、特別委員会だと、有るわ有る
わ、一省関係だけでも二十も三十もあり、

開店休業中もさらにあるが、お手当だけは決して休業はない。かけもちの委員さんがちよいと面通しするだけで、これも月のお手当が何十万、汗水たらして真黒になって働いて、月取せいで八万円か九万円て一家五人の生活を守る勤労大衆が、何千万人といふことを、不合理とも不公平と思っていない学識経験者である。

5 不平等社会を作りだす政治の一面面であるが、またまた昨年度の高額所得者が五月三日の新聞紙上で報道された。最高所得者十四億五千万円、氣のおくなるような金額であるが、それは何の努力も、危険負担もない。ただ寝ていて儲けた不労所得、土地成金である。それが高額所得者二千八百余人中、実に八〇%までが土地成金、それもほんの一部分を売った差益である。

日本は資本主義国であり、自由経済の国であり、法の定めた範囲内で、何で儲けようとして自由であり、土地でも株でも、競馬でも一向に差支えはないはずであり、たまたま土地ブームで百倍、千倍に急騰して十億円、百億円儲けても所得税法に従って一定税額を納めさえすれば天下晴れての自由で

あり、はたで文句も言えない。

他人を犠牲の利益追求競争、負けた奴から首吊りが出ようと、一家心中が出ようと一向に平気で、儲けた奴が天下を取る。贅美のかぎりをつくす。真面目に働く国民は人間らしい生活もできない日本。文化の恩典に浴し、世界一の遊興三昧にふけるのも、不労所得階級だけの日本。人間の作った法律がどうあろうとも天意が許さない。良心の麻痺した政治が生んだ悪政なのだ。不労所得の罪悪性に気付かないほど良心が麻痺した日本である。

6 お手盛りの歳費が月額五十万円、非課税交通費、通信費三十万円、調査費二十万円外に委員手当が五重六重、国会議員の月収は、働く階級の二十倍、三十倍に当らう。

そんな次元の違う高額所得者に政治を任せて民主政治が生かされるわけがない。それに大衆が気付くまで平和な住み良い民主主義国家は期待できない。

7 真理の神は許していないから、人間共が勝手に作った「所有権絶対の法律」国が亡びるまで死守する気か。

新幹線鉄道用地だ、高速道路用地だ、日本列島改造だと、土地買収に暗やくる政治家、不動産業者、素人土地屋と入り乱れての猛活躍。熊の出る北海道の奥地まで別荘地だ、ゴルフ場だと買いいおり、土地の急騰騰限なし。ちよいと一部分を売却しても二、三千万円はとび込んでくる。東京近郊で、マンションを買って子供を大学に入れている話をよく耳にする。今の農家は、大抵、億万長者であるから、南国の蜜蜂が働かなくなるように、段々泥んこ仕事に働かなくなる風潮が強い。百姓廃業続出が政治問題化するのも速くあるまい。

8 公僕の看板をかかげた官吏の俸給も上級者ほど高給で、同じ人間でありながら下級者の五倍十倍は珍らしくない。事業会社でも社長の月給百万円、平社員は平均月給七、八万円はざらである。こんな不公平が

あるかぎり労働争議も賃金闘争も当然である。こんな旧習が改まらない限り、民主主義も平和憲法も絵にかいた餅にすぎない。イスラエルのキブツでは、肉体労働も知能労働も同一価値であり、二千人のキブツ共同体でも長と名のつくものは一人もいない。二ヶ年交替制の委員によって運営され、一切平等に徹している。

時代は一步一步と不平等社会の是正に前進している。真理に忠実な先覚者は日本でも皆考えてきている。今のままでは無事におさまる日本ではない。

以上八項目を挙げてみたが、決して中傷でも暴露文章でもない。またその何れも最近の一流新聞雑誌で見たものばかりを集めて書いたにすぎない。一々書き並べては際限のないほど不正、不信、不倫、腐敗、不健全日本となり下っている。正に元禄時代の江戸城をめぐる乱脈ぶりそっくりである。八代將軍吉宗の英断は磔刑、打首、流刑併せて三万人、財産没収刑五十万人に及んだという。昭和の元禄世直しも、それ以上の英断なしには改まらないであろう。

勿論、不正不純の資金入手ではあるまい。

合法的金儲けのチャンスをつかみ易い立場にいるから、土地でも株でも、礼金でも三年に一度の選挙費用、五千万円、一億円と荒稼ぎができるのかも知れない。真面目人間では歯が立たない政界である。だが国民大衆はもう気付いてもよいはずだ。そんなお大尽を、自分たちの代表として、国会に送っても、決して働く階級の味方などになるわけがない。個人主義日本人には、それが解らないらしい。全体を活かす哲学は、日本には通用しないらしい。あすを忘れた個人主義日本、中東危機より日本の危機が警戒である。

三、協同協力こそ新時代の生き方

人生観が違えばキブツは判らない

世界は対立競争時代から、協同協力時代に移行している。それに順応するものは栄え、逆行するものは亡びよう。旧秩序に拘わるものは後者であるが、それが解っていないも改めることは常人ではできない。私が一九六二年

十一月(十年前)はじめてキブツ共同体を視察研究して、アツこれだ、これこそ人間社会が求め求めて求め得なかつた新しい時代の生活原理であり、対立葛藤に疲れきつた近代人を救う原理はこれだとみたのは、産業界五十

年の、経済闘争の空しさ愚かさを骨の髄まで知りつくしていたからであった。

親も愚かでも愚か、出世主義、功名主義、金儲け主義と、物心のついたところから、いがみ合い、勝ったり負けたり傷ついたり、それで本望をとげた奴は千人に一人か万人に一人しかない。万人に一人の儲けた奴も、親が築いて子が崩す。不幸をみるのは孫子まで。

長い半世紀以上の事業歴をもつ私には、友人知己幾百人あったが、富と長寿と子孫繁栄を併せ得た人は殆んどなかった。何をくよくよ、あせりにあせり、蝸牛角上の争いが恥かしい。

仲良くすれば誰一人不幸も、貧困もないものを、己れ一人の功を焦り、万人に敗北の悲しみを与えて、儲けた奴が勲章にもありつける。何と馬鹿げた資本主義日本かな。

膨大な国土のアメリカやカナダなら、資本主義の大農経営も可能であり、近代化個人農業も不合理ではないが、日本でそんな真似をするためには、一村何十何百戸が、消滅を意味する。そんなことは採算上からも不可能であろう。だが、日本と雖も農業は近代化して世界水準の生産原価を目標に合理化経営の必要は急である。そのためには共同体化して農

工一体化方策を考えるべきである。その見本として、イスラエル国に発達したキブツ、または、モシャブ・シトフィーが、大いに参考となるだろう。

日本の政治家も、もっと真剣に考えてもらいたい。日本の国土は三十七万平方キロ、耕地や宅地に利用できる面積は十二万平方キロがせいぜいである。内農地として利用可能な面積は一万ヘクタール内外にすぎない。これを最大有効に活用して、一億二千万人口（十年後の予定人口）を養う必要がある。労働力として効少く生産原価が世界水準の二倍以上もかかる零細個人農業など許すべきではない。一村協同体化により、農地を最大有効に利用する必要がある。水田二毛作など義務付けるべきである。国土は国民のもの土地私有こそ国是に反している。

日本こそ土地国有化の必要がある。せまいながらも計画的に合理的に有効に活用すれば利用価値は倍加する。農工商と土地の利用者は一定条件下で借受ける。かくしてこそ国土と国民とが結び付いて国土愛となり、全国民が草木一本まで愛情を感じ、情操も豊かになる。イスラエル共和国では、土地は国民所有であ

り、ユタヤ基金本部が管理している。利用者は四十九年期限で借受ける。期限が来ても、更に四十九年期限で借替できるので、私有と変りはないが、観念が違ふのだ。利用者は利目的の変更も転貸も許されない。また、国策上の必要があれば直ちに返還させられる。即ち公益優先である。

キブツ共同社会こそ、人間社会の在り方の本筋であって、個人主義、個別対立社会こそ邪道なのである。人間は生身の体であるから、病氣もあれば、怪我もある。災難もあれば老人にもなる。いつ死ぬかも知れない。生きることは冒険でもある。一家の主人公が死んだら忽ち妻子は路頭に迷う。だから一生懸命に働いて蓄財もする。

だが、貯金も保険もインフレ紙屑化の危険がある。どんな私財も時世の変化で一変する。他人を押しつけて億万長者になつてみても、五十年前のドイツでは一億マルクが一マルクにされてパン一片の価値に変わっている。日本でも三十年前の一万円には定期預金にして利子が年六百日、その金利だけで中流生活ができた。今日では一食の食事代にも足らない。三十年五十年前先の安定など個人で確保することは不可能である。

ところが、百人でも二百人でも共同化したら、それが一介の労働者であっても、忽ち絶対安定生活が可能になる。誰が病氣になつても怪我しても、三人や五人年中病床にあつても、皆んで十分間も余計に働けばよいのだ。インフレになつても、老人になつても、今日を守ってくれる働手が次ぎ次ぎに育っているから平気である。常に安心立命の境地にあるので、キブツ人は一目してわかるほど明朗である。キブツの特長を数項あげて本文をおわることにする。

1 人間平等観の実践社会

神から（真理）みた人間は平等である。この真理に忠実であれば、人間社会は平和で幸福である。民主主義を説き、正義を唱えてみても、不平等社会に固執するかぎり、それは対立闘争の因子であり、人間四欲（食、色、財、権）の助長となり、波風が常に絶えないであらう。

教育水準が高まり、民主化が進めば進むほど、人間平等観が普遍化する。その一方では人間四欲の執着から、今の不平等社会を維持せんとする旧支配勢力が頑張って

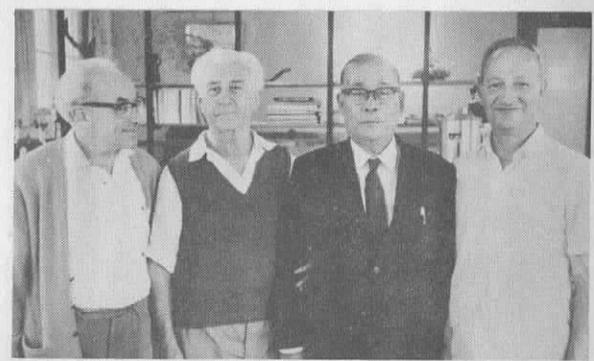
る。それが新旧秩序の衝突となり、社会不安の原因となる。キブツは協同体化により、対立観を一掃し、平等社会の確立に成功している。

2 労働を売買性格から救い出し労働の神聖を確立したキブツ

人間が神に近づく唯一の近道は労働である。人間が生きる権利を覚り得るものは労働である。これはゴルドンの労働哲学である。ユタヤ民族が自ら額に汗してパレスチナの大地に奉仕する決意と実践がなければ、イスラエル国家の再建などナンセンスであるとゴルドン博士は主張し実施もした。

最初の移住ユタヤ人は資金を投じて農場を経営したが、経営者、監督者まではユタヤ人であったが、労働者はアラブ人ばかりであった。ゴルドン博士はそれを厳しく戒めたのであった。

北欧から移住してきたユタヤ人の青年たちは、教師も牧師も文学青年も、みなゴルドン思想の同調者となり、砂漠化した荒地の開墾に取組んだ。そこに真に自覚した



左から、メッシンガー、ポラーニ、テスカ、モシェ・ザミール
於キブツ・ラマト・ヨハナン

知識階級の肉体労働体験から、全く新しい労働観が誕生した。賃金などでは計り知れない労働の意義である。そこに気付かなかつたから、ユタヤ民族は流浪二千年の苦杯をなめたのである。農は国の基、それは千古の金言である。かくして神聖なる労働は搾取の対象にもならない。商品化からも脱去した。賃金で

汚す恐れも無いキブツ労働哲学が生まれた。人間が生きる権利を覚って働く労働は良心的な労働である。

(この労働哲学が理解できればキブツ研修の大収穫である)

3 キブツ共同体には貧乏も貧乏感もない

地球資源はまだまだ充分ある。耕す農地はまだ世界中に七〇%も残っている。人知の発達で生産手段は進歩した。物資も食料も事欠く段階ではない。だのに世界人口三十六億人中、その七〇%が貧乏人であり、内三〇%は飢民である。

その原因を調べてみると、国家も個人も利己主義一天張り、奪い合い、いがみ合いに終始しているためである。一村でも一部落でも共同体生活で助け合えば困る人も貧乏する人も皆無である。

その証拠を雄弁に教えているのがキブツである。岩石だらけの砂漠で年間雨量八〇ミリ。散水なしでは草一本も育たないとこを开拓して、だれでも驚く高文化生活を営んでいる秘訣は「共同体」そのものにある。



テスカ、ハラッシュ
於キブツ・ダリヤ

る。キブツを真似たら貧乏人は一人もない社会となる。

4 キブツに私有財産なし心の豊かさはそこにある

キブツでは私有財産はないが共有財産なら何十億円もある。私有財産は取られる心配、減る心配、心の休まるひまもないが、五十年保てた例は稀れである。生老病死のつきまとう人の世は興亡浮沈常なきならい、あすの命もさだかでないのだ。個人財産の守れないのは当然である。共同の財産なら共同の力で守れるから、安全性は何十倍にもなる。それに財は集るほど偉力を生ずる。百億円の資金も日本国民一億人に分配すると一人百円で軽食一食もあやしいが、いく

ら今日でも百億円あれば大事業もできる。共同体の偉力を理解することが、キブツを知る第一歩であろう。

5 労使の対立がない経営形体

キブツも資本主義国イスラエルの生産体であり、対外的には一般産業会社と変りはないが、対内的には非営利団体であって日本の財団法人に似ている。そして、最も特異とするものは労使なき経営形体である。

二十人のキブツでも、社長も理事長もいない。一ヶ年または二ヶ年で交替する委員によって運営されており、ボスの存在の発生を防止している。そして、労使なき経営、賃金なき労働である。全員が労働者であり全員が経営者でもある。毎週一回全員総会を開催して、多数決で決定する。労使がないから対立もない。賃金がないから奪い合いもない。各国がその能力に応じて働き、必要に応じて分配を受けるから、不平も不満もない。加入も脱退も自由であるから、無理がない。これで他の営利会社以上の発展をみているから、永続性を疑う必要もないであろう。